

愛媛考古学

第 29 号

四国地方におけるフグ食文化の黎明

－愛媛県江口貝塚出土の縄文時代前半段階に属するフグ骨資料をもとに－

..... 幸泉満夫 1～8

先史石製漁網錘の使用痕観察にもとづく新たな研究シーズの確立に向けた予備的考察

－今治市糸大谷遺跡出土の打欠石錘群に対する新たな観察所見をもとに－

..... 幸泉満夫・高橋涼輔・平本芽唯・塩見はるな
寺地菜々美・都留陽葵・二宮 凜・逢澤柚希 9～20

今治市茶臼山古墳群の測量調査 山本達也 21～32

予州松山城跡出土文化財にみる“縮みの文化”と地域資源創出に向けた新たな展望

－近世後期～幕末期の未公開ミニチュア容器類に対する基礎的考察－

..... 幸泉満夫・山本さくら・塩見はるな・高橋涼輔・寺地菜々美・平本芽唯 33～54

予州松山城の箱庭道具に関する予備的考察

－松山城三之丸跡出土の近世箱庭道具類の公開とともに－ 寺地菜々美 55～62

新居浜市正法寺出土瓦について 岡田敏彦 63～88

平成30年試掘調査出土の正法寺泥塔について 大西覚朗 89～104

愛媛県有石工銘石造物一覧 十亀幸雄 105～128

2025

愛媛考古学協会

予州松山城の箱庭道具に関する予備的考察 －松山城三之丸跡出土の近世箱庭道具類の公開とともに－

寺地 菜々美

1 はじめに－問題の所在－

国史跡松山城跡では、1996～1997年の愛媛県美術館建設にかかる三之丸跡（県民館跡地点）の緊急発掘で、近世後期～幕末期にかけての数多くの成果が得られている。同調査では、コンテナ総数550箱分にも及ぶ膨大な遺物が検出されている。しかしながら諸処の事情により、今なお未報告資料が数多く存在しているのが実情である（土井・門田編2000）。

本稿では、当該調査で出土した近世後期～幕末期帰属の箱庭道具類のうち、未公開資料、計5点を新たに図示公開するとともに、当該期前後の箱庭文化の解明に向け、若干の考察を試みることにしたい。

2 箱庭道具とは

そもそも箱庭道具は、平安時代の「州浜」や賀茂祭りの「風流傘」に由来するとされ、鎌倉時代には盃蘭盆に細工物を置き、灯籠を灯すことが民衆の間で行われていた（安芸毬子2001）。史料に基づく安芸の考察に沿えば、17世紀後半には、すでに庶民の間でも盆時期に箱庭飾りを愛でていたようである⁽¹⁾。

この箱庭道具に関しては、安芸が以下の通り定義している。

「箱庭は、小さな箱や盤に木や岩を配し、橋や灯籠、舟、人形を置いて景色を楽しむものである」（安芸2001）。

しかしながら、予州松山城のような地方においては、未だ図示公開すら充分ではなく、箱庭道具を対象とした論考等も存在しない。幸い、愛媛大学法文学部の考古学Ⅱ研究室（以下、幸泉ゼミ）では2019年度以降、国史跡松山城跡より得られてきた考古系出土文化財を中心に、歴代様々な調査研究活動を試みていているところであり（幸泉・寺地・畠中・山本2025ほか）、2025年度には、箱庭道具に関する一括借用の機会を得ることができた。そこで以下、筆者が同資料群の実測を担うことで、多少なりとも当該研究命題への貢献を試みることにしたい。

3 遺跡出土の箱庭道具類の分類

写真1は、1853年の歌川芳綱（登斎）による「新板箱にわづくし」（国立国会図書館蔵）である。箱庭とは、このように山水や建物などを配し、作り上げた景観を楽しむものである。

しかし、遺跡からの出土資料で上記のようにセット関係を成す例はまれで、庵や鳥居、灯籠等といった部品が断片的に出土するばかりである。一方、遺跡ごとの出土内容を見てみると、それら部品の種類や形状など、時期や地域、遺跡の性格ごとで一定の差異が内在していることに気付

くことがある。従って、それらを体系的に整理し、将来に向けて評価していくためには、なるべく精緻な分類基準を予め提起する必要がある。

現在、箱庭道具は、東京大学構内遺跡出土の土人形・玩具で一通り分類されている（中野2010）（安芸・小林・堀内2012）。これを参考に、筆者が各地の諸例をもとに作成したのが第1図である。まだ暫定ではあるが、西日本を中心とした近世江戸時代の遺跡から出土した箱庭道具を、体系的に分類した。大きくは建物系と景観系、動産系に分かれる。

I-1群は建物系の中でも建造物であり、A祠、B塔、C庵、D城郭関係がある。

I-2群は建物系の中でも工作物であり、A鳥居、B中門、C橋、D灯籠がある。

I-3群は建物部位とし、塀や石段など、その他建物関係のものを分類する。

II-1群は景観系で、山や庵、塔等が一括で配される楼閣山水を分類する。

II-2群は景観系で、池や橋等がつけられ、庭園を模したものを分類する。

III-1群は動産系として、神輿を模してつくられた御神輿を分類する。

III-2群は動産系として、舟を分類する。舟単体だけでなく人物等が一体化したものも含む。

IV群には、上記のような小物類を乗せるための盤を分類する。

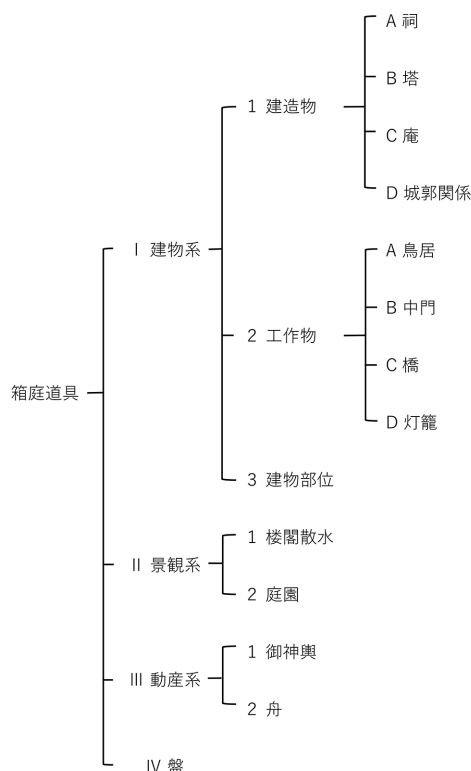
4 松山城三之丸跡(県民館地点)出土の箱庭道具類の公開

第2・3図は、今回筆者が実測した未公開の箱庭道具類である。以下、先の第1図における分類基準に沿ってみていくことにしよう⁽²⁾⁽³⁾。

1は、庵の屋根部分である。残高4.4cm、残長1.2cm、残幅4.4cmで、最大厚は0.6cmを測る。陶器焼成により堅致な仕上がりで、建物系の中でも建造物、庵に該当する。表面のみ、透明釉と緑釉が施釉され、



写真1 歌川芳綱1853「新板箱にわづくし」
(国立国会図書館蔵)



第1図 箱庭道具の分類 暫定版
(中野2010、安芸・小林・堀内2012を参考に筆者作成)

均一で細密な線による二段重ねの茅葺き表現がみられる。内側は指頭圧痕が確認されるのみで文様はなく、下部には建物本体部分が接合していたと考えられる。2、3との接合の可能性はない。

2は、庵の壁部分である。残高2.2cm、残長1.2cm、残幅2.7cmで、最大厚は0.7cmを測る。陶器焼成で精工な仕上がりで、建物系の建造物の中でも庵にあたる。表面には透明釉と緑釉が施釉されているが、建物内部にあたる内側に釉はみられない。表面には扉か窓の表現と考えられる沈線、側面には凹凸、内側に指頭圧痕がみられる。欠損しているが、透明釉が表面全体に塗られており、非常に丁寧な作りをしているとみることができる。1、3との接合の可能性はない。

3は、庵の土台部分である。残高0.8cm、残長3.8cm、残幅3.5cmで、最大厚は0.5cmを測る。素焼き焼成により堅致な仕上がりで、建物系の中の建造物、庵であるとされる。表面に透明釉が施釉されているが、建物本体と接合していた上部全体と、短辺の側面には釉がみられない。脚がある面には板の表現と思われる沈線が等間隔で刻まれており、欠損しているものの、脚の配置から横に長いと推定できる。1、2との接合の可能性はない。

4は、灯籠の脚部分である。残高1.3cm、残長1.9cm、残幅1.8cmで、最大厚は0.9cmを測る。素焼き焼成により堅致な仕上がりで、分類は建物系の工作物、灯籠である。表面には白釉が施釉されているが、ところどころ行き届いていない部分もあり、特に内側は、表面の施釉の際にはみ出した程度の付着にとどまる。小さな作りのため火袋の空洞的表現は省略されていると考えられる。また、三脚が特徴的な事例である。

5は、舟である。残高0.7cm、残長3.0cm、残幅1.2cmで、最大厚は0.3cmを測る。素焼き焼成で薄作りの仕上がりで、分類では動産系の舟にあたる。施釉はなく、表面には少々歪みが目立つ。景観構成の際、川や池部分に配置したとされるが、非常に小さいため上に人形を乗せたとは考えにくい。ミニチュア舟は人形を乗せて遊ばれたと一般に考えられるが、箱庭で舟が用いられる場合はむしろ、人形を乗せるという目的よりも、景観構成を第一に用いられた可能性が考えられる。

5 類例の検証

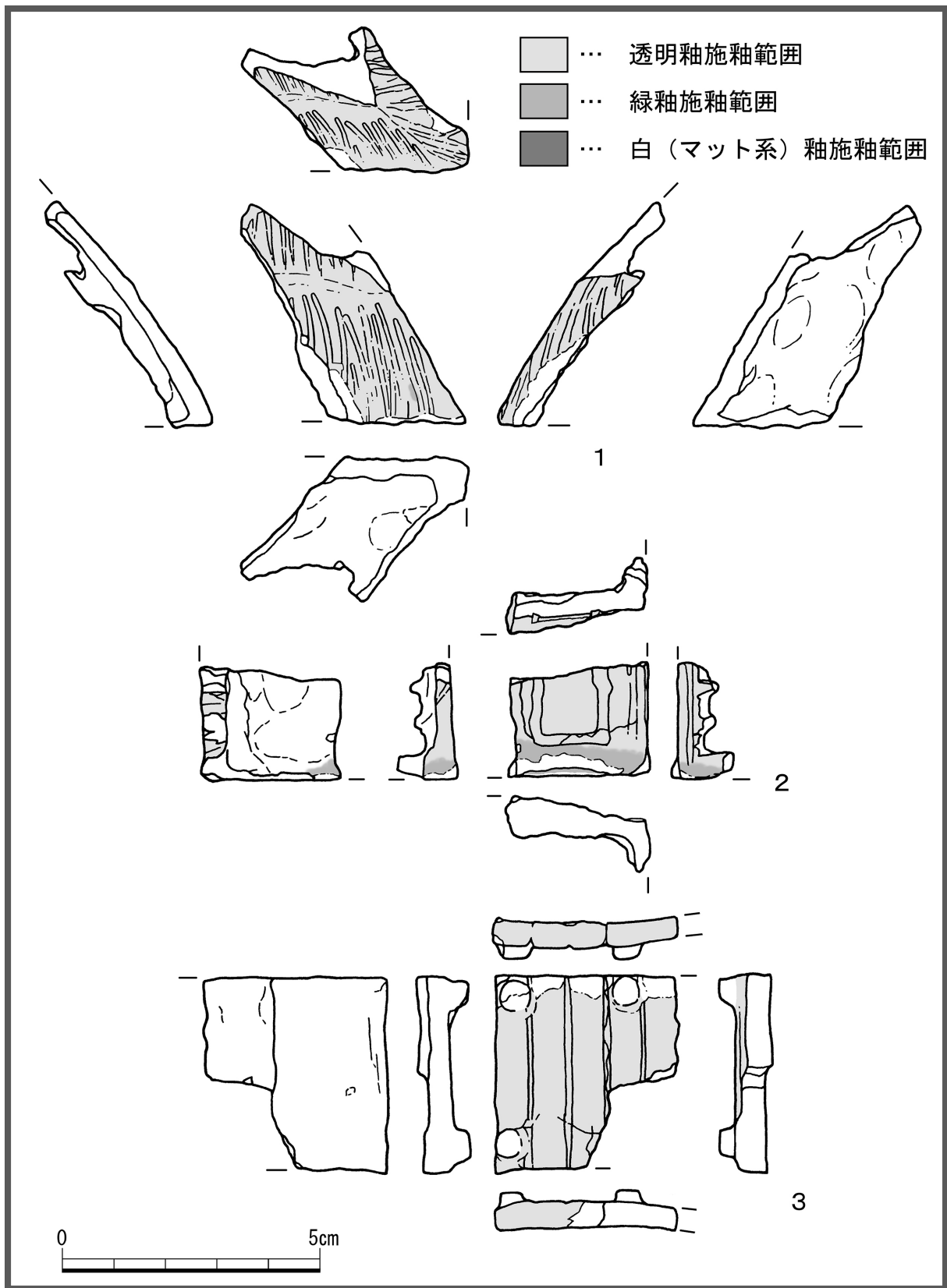
つづいて、前節で紹介した第2、3図各々の類例について、検証していこう。

第4図2は、第2図1の類例となる庵の屋根で、東京都白金館址遺跡からの出土事例である（滝口宏ほか編1988）。数は違うが、段数のある茅葺き表現という点で同様である。

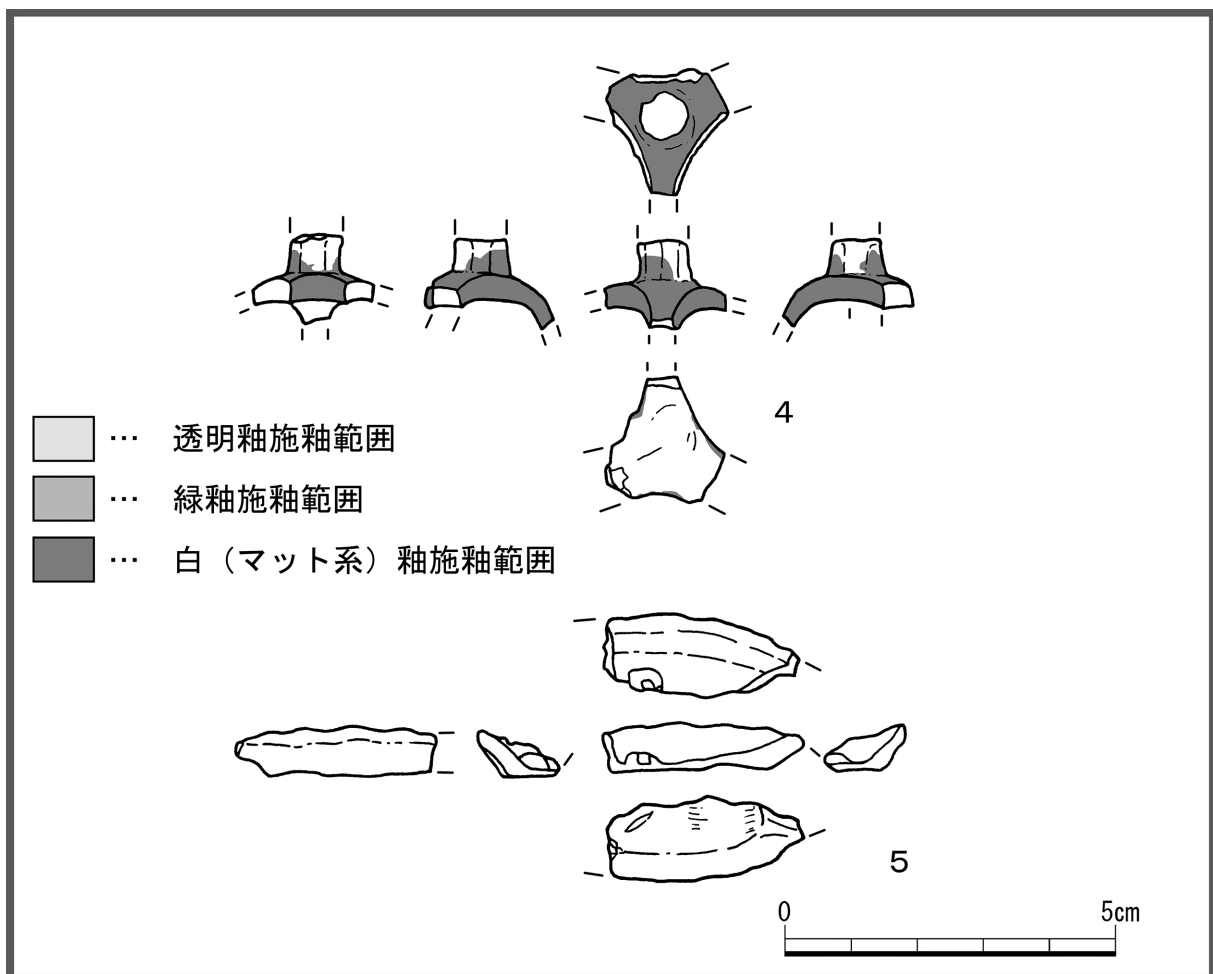
第4図4は、第2図2の類例となる庵で、東京都市谷砂土原町三丁目遺跡からの出土事例である（美濃部達也ほか編2002）。沈線での表現は完全に合致しないが、側面の様相を推測すると、事例のような建物表現の作りがあると思われる。

第4図3は、第2図3の類例となる庵で、東京都白銀町遺跡からの出土事例である（東野豊秋・黒田恵之ほか編2004）。底部に板の表現はないが、脚付きの庵であり横長のものである。今回実測した遺物は、脚の配置から類例より大規模と推定される。

第4図1は、第2図3の類例となる灯籠で、東京都四谷一丁目遺跡からの出土事例である（谷川章雄ほか編1998）。火袋の空洞表現が省略されており、三脚が特徴的な事例である。今回実測



第2図 松山城三之丸跡出土の未公開箱庭道具類(1)



第3図 松山城三之丸跡出土の未公開箱庭道具類(2)

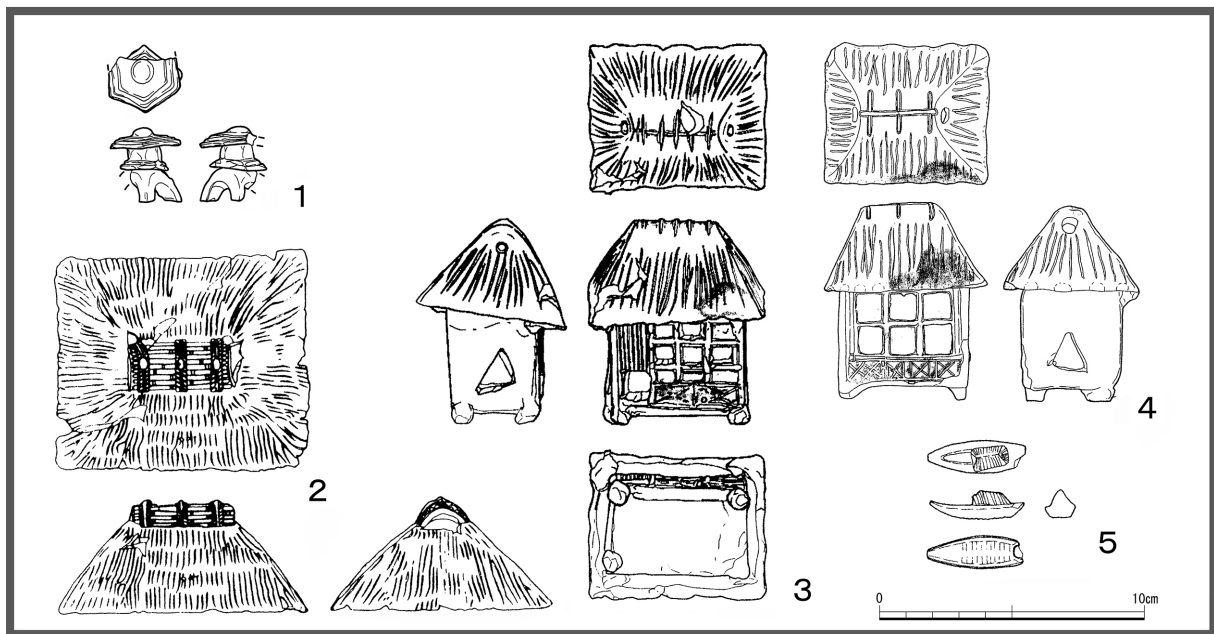
した遺物は、類例より脚が長いと推定される。

第4図5は、第3図5の類例となる舟で、山梨県鰍沢河岸跡からの出土事例である（村石眞澄ほか編2005）。内部に建物屋根が見られるタイプであるが、残長から推定できる大きさが非常に近いものである。

6 成果と展望

以上、本稿ではこれまで未公開とされてきた松山城三之丸跡出土の箱庭道具類の図示公開をもとに、以上のような検討を行ってきた。結果、以下に示す4つの所見を得ることができた。

- (1) 素材・寸法・生産方法から地域性や年代変化、セット関係の推測が可能である。
- (2) 舟は箱庭の規模や性格予測の一つの手がかりとなる。
- (3) 箱庭道具には全国集成の必要性がある。
- (4) 箱庭道具に関してはさらに精緻な分類基準を検討していく必要がある。



第4図 箱庭道具類の類例

1四谷一丁目遺跡(東京都)、2白金館址遺跡(東京都)、3白銀町遺跡(東京都)、4市谷砂土原町三丁目遺跡(東京都)、5鯉沢河岸跡(山梨県)

冒頭でも触れたとおり、箱庭道具とはそもそも、小さな箱や盤に自然景観物を配し、その周囲に橋や灯籠、舟、人形、建物などをめぐらせて景色を楽しむもので、広く玩具類の一種と理解されてきた。ここまでは文献史料から既に把握されてきたところだが、その詳細は未だ考察が不十分である。構成器種類についても、実測図等の公開情報の不足によって不明な点が多いのが現状で、基準とされることの多い江戸東京の出土事例のみでは、網羅的な全国分類基準を定めるには至らない。

また、景観を構成して楽しむという性質上、ある程度の統一感が求められるため、セット関係の類型化が不可欠となろう。しかしながら、学史上、箱庭道具同士の関係性については考察事例が非常に少なく、各々のパーツの観察のみにとどまる場合が大半である。完成品の形態や素材から、地方でもある程度の年代的な生産傾向や変遷の推定が可能と予想されるが、遺跡によっては帰属年代が不明なケースや、実測図に具体的なスケールの記載のない場合があるなど、報告書の情報のみからでは全体像を明らかにできない。

本稿では箱庭道具類の体系化を視野に、未公開資料の六面展開を含めた図示公開をもとに考察を経ることで、以上の見解を提起してきた。特に、従来の学史上では詳細に触れられなかった分類、観察、考察の手順を踏むことによって、西日本における同一生産地特定の可能性や、販売者側のセット配置例、生産技法の年代ならびに地域差などの、広域的な比較追究が可能だと捉えている。

今回紹介した遺物同士にはそうしたセット関係は看取できず、年代差等も明らかにできなかったが、今後、同調査区域における他の関連遺物の比較が有効と思料している。

さらに、今後の詳細な分類基準の構築を意識することで一層の細分化が射程に入りつつある。例えば、灯籠の種類や塔の階層などによる大別は指摘されてきたところであるが、同種類内の型

式差や表現の省略化傾向などを加味することで、一つの器種間でもかなりの細分が可能とみている。また、本稿で扱った庵の壁と土台部分に関しては、その他建物の一部を暗示する可能性も残る。仮に庵ではないとすれば、未知の建物類型が潜在する可能性もあり、今後、景観構成の解釈拡大も期待できよう。

舟に関しては、ヒト形とセットを成す場合と、そうでない場合とがある。後者のケースでは舟の上に人形を乗せたと想定されるが、舟そのものが小さい場合はその可能性も考えにくい。道具同士のセット関係が把握できた場合、その箱庭が遊戯的一面を有していたのか、あるいは景観を重視したものだったのか、用途差への言及も可能になるかもしれない。

近世を中心とするわが国のほぼ全土に分布する箱庭道具類に対して、今後、同様に集成、実測、研究を重ねていくことが叶うならば、わが国の、箱庭道具類の盛行と衰退、派生に至る一連の歴史的プロセスの復元や、それらの学術上の意義についても、何れより総合的な視座から論述可能になるものと、誠心誠意努力を重ねているところである。

(2025年9月3日)

謝辞

本稿作成にあたり愛媛大学法文学部の幸泉満夫先生をはじめ、愛媛県教育委員会、愛媛県埋蔵文化財センターの皆様方には、大変お世話になりました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

註

- (1)『日本歳時記』(1688年)・『天和長久四季遊び』(1681～87年)(安芸2001)。
- (2)各資料の出土地点は、1がSK-67、2がSK-577、3がL-12東西トレンチ内一括、4がG区F-22トレンチ内一括、5が廃土内一括である。
- (3)出土層位の明らかな資料としては、1が江戸0期(19世紀代～明治10年まで)、2が江戸Ⅲ～Ⅱ期(17世紀代～18世紀代)、その他は不明である(土井・門田編2000)。

参考文献

- 安芸毬子(2001)「遊・玩具4 泥面子」『江戸考古学研究事典』柏書房 224-225頁
- 安芸毬子・小林照子・堀内秀樹(2012)「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報8 2009・2010年度』東京大学埋蔵文化財調査室 259-308頁
- 川口宏海(2009)「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土のミニチュア土製品(1)」『大手前大学論集』第9号、大手前大学 79-111頁
- 関西近世考古学研究会編(2008)『関西近世考古学研究16 土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究会
- 幸泉満夫・寺地菜々美・島中航志・山本さくら(2025)「松山城三之丸跡出土の近世化粧道具類に対する予備的考察」『愛媛考古学』第57号、愛媛考古学協会
- 斎藤良輔(1997)『新装普及版 日本人形玩具辞典』東京堂出版研究会
- 滝口 宏ほか編(1988)『白金館址遺跡Ⅱ』白金館址遺跡調査会
- 谷川章雄ほか編(1998)『東京都新宿区四谷一丁目遺跡』新宿区四谷一丁目遺跡調査団
- 寺島孝一ほか編(2001)『図説 江戸考古学研究事典』柏書房

土井光一郎・門田智美編(2000)『史跡「松山城跡」内 県民館跡地』愛媛県埋蔵文化財調査センター
中野高久(2012)「都市江戸におけるミニチュア箱庭道具の意匠と展開 ～土人形・玩具類の資料化に向けて～」『江戸遺跡研究会第23回大会 都市江戸のやきもの』江戸遺跡研究会 117-174頁
榑崎彰一ほか編(2008)『土人形が見た近世社会』関西近世考古学研究会
日本人形玩具学会編(2019)『日本人形玩具大辞典』東京堂出版
東野豊秋・黒田恵之ほか編(2004)『東京都新宿区白銀町西遺跡・白銀町遺跡Ⅱ 白銀町西遺跡白銀町遺跡Ⅱ』テイケイトレード株式会社
美濃部達也ほか編(2002)『市谷砂土原町三丁目遺跡』財団法人新宿区生涯学習財団
村石眞澄ほか編(2005)『鯉沢河岸跡Ⅱ』山梨県教育委員会

挿図版典拠

第1図：筆者作成。第2～3図：筆者実測、筆者清浄。第4図1：谷川ほか編(1998)。第4図2：滝口ほか編(1988)。第4図3：東野・黒田ほか編(2004)。第4図4：美濃部ほか編(2002)。第4図5：村石ほか編(2005)。

編集後記

このたび、『愛媛考古学』29号を刊行することができました。平素よりご多忙の中、ご執筆いただいた各人に、事務局一同、まずはお礼を申し上げます。

今回、総勢13名、論文・報告の数は8本となりました。ご執筆いただきました皆さまには、ご無理を申し上げましたが、おかげさまで会誌としての体裁を整えることができました。ありがとうございました。

次号は通算30号の節目の号になります。会員の皆様には、節目の号として大いに盛り上げていただきたく存じます。もちろん、次号以降も会員の皆様の熱意のこもったご投稿をお待ちしております。また、新規会員も募集しております。入会していただければ幸いです。

それでは、今後も、この『愛媛考古学』が会員の皆様の情報交換と研究発信のため活用されるよう、そして当会が益々活性化できるよう、会員一同、本誌の充実に努めてまいりたいと思いますので、皆様方のご協力をどうかよろしく願いいたします。

それでは、次回30号でお会いしましょう。

(いし)

【愛媛考古学協会役員】

会長：岡田敏彦

副会長：兵頭 勲

事務局委員：沖野 実・首藤久士・石貫弘泰

会計幹事：井出耕二・土岐幸司

名誉会長：名本二六雄

愛媛考古学協会

第29号

令和7(2025)年12月24日

編集・発行 愛媛考古学協会 会長 岡田敏彦

印刷 有限会社ニシダ印刷製本

〒590-0965 大阪府堺市堺区南旅籠町東4-1-1
